

真田神社の例大祭

添田 悟郎

The regular festival of Sanada Shrine

Goro Soeda

神奈川県平塚市真田に鎮座する真田神社では毎年7月第2日曜日に例大祭(通称真田まつり)が執り行われ、大人神輿(以降大神輿)1基と子供神輿2基(中・小)および囃子の山車が真田地区を巡行する。かつての真田神社は「真田の天王さん」の名で親しまれ、旧玉垣の寄進者名を見ると信仰圏の広さでは平塚市域で最大級の神社であったといえる。さらに真田神社の祭礼は旧高座郡や中郡一帯の地域で最大級の規模であったと伝えられ、近隣の村々では真田神社の祭礼までに田植えを済ませるとというのが大きな目標となっていた。以下に平成24年(2012年)7月8日に行われた例大祭と、前日の宵宮の様子を紹介する。

Sanada Shrine located in Sanada, Hiratsuka-shi, Kanagawa-ken holds its annual festival “Sanada-Matsuri” on the second Sunday in July; three portable shrines which include two children’s mikoshi and the float for matsuri-bayashi parade through Sanada area. Sanada Shrine was once commonly known as “Sanada-no-Tenno-san”; in addition, it is supposed to be one of the largest shrines in present Hiratsuka-shi area from the names of the benefactors who subscribed the old fence “Tamagaki”. According to tradition, its regular festival was also one of the largest all over the old Koza-gun and Naka-gun area, and villagers who lived near Sanada had main objective to finish rice planting by the festival. In this report, I introduce the festival in 8th July 2012 and its previous day “Yoimiya”.

1. 真田神社

1-1. 真田神社の歴史

真田の鎮守である「真田神社」は「真田の天王さん」の名でよく知られた神社で、集落の東端(小名では宿)に鎮座し、祭神は「建速須佐之男命」である。真田神社は与一堂と共に近郷近在から篤い信仰を受けていた神社であり、祭礼には真田近在の村々だけではなく、横須賀・藤沢・相模原・秦野・二宮・小田原などからも参拝者が多くあった。



図 1-1. 真田神社



図 1-2. 社殿

天保12年(1841年)完成の『新編相模国風土記稿』によると「牛頭天王社」が2つあり、1つが鎮守(天徳寺持)で拜殿・神楽殿があり、もう1つは村民持ちであった。鎮守であった牛頭天王社が現在の真田神社に当たり、天正19年(1591年)11月には徳川家康公より一石五斗の神領を寄附されている。真田神社の近くにはかつて真田与一(1155~1180年)の居城があり、与一の郎党陶山文三の子孫が京都の八坂社を勧請し、真田の地へ牛頭天王社を創

建したという伝承が残っている。牛頭天王社は明治3年に「八坂神社」と改称しており、明治6年(1873年)に村社と定められ、明治9年(1876年)8月に真田神社と改称し現在に至っている。

1-2. 信仰圏

真田神社の祭礼には近郷近在の農村の人々だけでなく、相模湾沿岸の漁村の人々も多く参拝するなど、相模川下流域西岸では最も大きな信仰圏を持っていた神社であるといえる。参拝者の範囲を具体的に示す資料はないが、田植えは真田の天王様までに済ますと言っている地区や、真田神社の旧玉垣の寄進者によって概ねその範囲を知ることができる。明治14年(1881年)の玉垣からは旧大住郡と洵綾郡のほぼ全域、足柄上郡東部と下郡の南部、そして愛甲郡の範囲となっている。昭和27年(1952年)の玉垣では平塚・秦野・伊勢原・大磯・二宮・小田原・中井・藤沢・横浜、それと東京の範囲となっている。藤沢付近の寄進者は少ないが、藤沢でも真田の天王様までに田植えを済ませるという所が多く、また玉垣の寄進は金銭的な問題も関係するため、実際の参拝者の範囲は上記よりも広がったと推測される。

1-3. 大阪から来た鳥居

境内の明神鳥居の柱の裏には「文久三癸亥年(1863年)六月 石工 大阪(大坂)炭屋町 見かげや新三郎」と刻まれ、傍らの添碑

の文面から次のことが判る。この鳥居は瀬戸内海沿岸の花崗岩で、大阪石工の見かげや(御影屋の屋号)新三郎が製作し、大阪より船によって三浦半島の浦賀に運び、さらに船便で平塚の須賀湊に運ばれた。そこから真田村まで近郷近在の村々が協力して運搬したが、村々は中原・豊田本郷・豊田宮下・豊田小嶺・豊田平等寺・矢崎・別名・北大縄・西海地・大畑・丸島など11ヵ村以上を数える。明治維新を目の前にした幕末期に商業経済もかなりの発達を見ていたであろうが、相州(相模国)の一寒村の牛頭天王社が大坂から花崗岩の鳥居を調達したことは稀有のことといわざるを得ない。近在からの厚い信仰を受けていただけではなく、それを支える財力に対し瞠目するだけである。伝承では漁師や仕事師の信仰が篤く、須賀(平塚市)や南湖(茅ヶ崎市)、そして鎌倉などの漁師は必ず参拝していたという。



図1-3. 明神鳥居



図1-4. 柱に彫られた文字

2. 真田の地区区分

天保6年(1835年)の真田村「地誌御調書上帳控」によれば、真田村には「久保」・「原」・「宿」・「谷戸」・「寺尾」・「横町」の6つの小名があったことが分かる。この小名全てが集落を含むものかどうかは分かっていないが、天保元年(1630年)頃の古地図を見ると、久保・原・宿の3つの小名には集落が存在していた様である。近年の真田地区にあてはめると真田神社の裏手にあたる「宿」、天徳寺の東側丘陵の「寺尾」、天徳寺の西側に対面する久保谷戸と呼ばれる谷状の地形沿いに展開する「久保(窪)」、この谷戸の南奥から台地に至る「原」、久保のさらに西側で現在は谷津と称される「谷戸」となる。残った横町がどこにあたるのかは不明だが、近隣組が三つに分かれる宿のいずれかに相当するのではないかとと思われる。

近年の真田は東部の「坂上」と西部の「坂下」に二分され、坂上を真田東部自治会、坂下を真田西部自治会と呼び、さらに坂上が宿の上・中・下と寺尾、坂下が久保、原、谷津の近隣組に別れる。真田の古くからの集落は北金目台地の西北に開けているが、景観的には大根川へ開く谷津沿いの坂下と、東側に真田村の田地の主要部分を望む台地上の坂上に大別できる。しかし、真田地区は北金目地区と共に大規模な開発が行われており、かつての景観は大幅に変化して来ている。

3. 真田神社の祭礼

3-1. 祭礼の歴史

真田神社の祭日は『風土記稿』によると旧暦の6月7日で、明治3年(1870年)や明治4年(1871年)の資料にも祭日が6月7日とある。その後は7月9日になったが、いつ頃から7月9日に祭

礼を行うようになったかは不明である。平成10年(1998年)から祭日は7月9日付近の日曜日に変更となり、現在は7月第2日曜日になっている。7月9日に祭礼が行われていた頃の段取りを記すと次のようになる。

- 7月上旬(ノアガリ)・・・宮世話人等寄合い→当番(年番)寄合い
- 7月5日・・・餅つき(糯米1俵)、餅のぼし、オスワリ作り
- 7月6日・・・御供切り(餅を切る)
- 7月7日・・・買物
- 7月8日(宵宮)・・・掃除・幟立て、神楽殿設営、オカリヤ設営、榊・鯉をとりに行く、式典、神輿ミヤダチ→オカリヤ安置
- 7月9日(本宮)・・・式典、神輿がオカリヤ→ミヤヅキ、神楽
- 7月10日・・・片付け、神輿掃除、ハチハライ、収支決算

祭礼の準備や諸役は坂上と坂下が年番となって行うのが原則となっていて、ちなみに昭和54年(1979年)は坂下(西部自治会)が当番であった。ここでは準備や片付けについての詳細は省略するが、当時の宵宮と本宮の様子を紹介する。

本宮の前日になると三ノ宮の宮司が5人の神職と雅楽奏者3人(太鼓・笙・箏)を伴って来て、宵宮には神社のオミタマを神輿へ移し、ミヤダチといってオカリヤ(行在所)まで渡御をする。以前は行在所を古屋寿家の前に作ったが、近年は公民館の前に作っている。ミヤダチした神輿はムラ中を渡御した後に行在所へ安置されるが、その両側には黒羽織を着た宮世話人が2人座っていた。行在所の神輿は翌9日の午後まで安置される。宮番は当番の者が行うが、行在所には2・3人が泊まり、残りが神社に泊り込む。なお、三ノ宮の宮司一行は当番の組が宿を世話して真田へ泊まる。

祭礼当日になると真田神社から与一堂までの道に露店が並び立ち並び、小屋物が3つくらいかかったこともある。鍬・鎌・桶などを売る農具市も立ち、鍛冶屋は伊勢原、桶屋は秦野から来たという。昭和30年(1955年)代以降に農具が機械化されてからは、平塚の農機具屋が近くの農家の庭をかりて実演をしていた。また、お化け屋敷やサーカスも来ていたという。麦藁帽子に白緋姿の人で押すな押すなの賑わいで、平塚駅から臨時バスが出たり、秦野街道は歩いて来る人で蟻の行列のようであったという。

午前中には神社で式典があり、午後には行在所でオタチの式典がある。神輿が神社へ帰るのは夜になり、これをミヤヅキといって、神輿からオミタマを神社へもどし、神官による式典が行われる。近年は素人演芸にかわっているが、以前は夜に神楽殿で神楽が行われ、愛甲(厚木市)の神楽師を頼んで神楽をあげていた。初めに三番叟をし、次に面神楽(神代神楽)、このあと筋物をした。この日は神楽師が真田へ泊まり、この宿も当番の組がおこなった。本宮の翌日は後片付けをしてハチハライとなる。

3-2. ホオズキ市と与一信仰

かつて真田神社の例大祭では、神社のまわりに「ホオズキ(ホウズキ)市」といわれるぐらいホオズキを売る店が立った。これは神楽を頼んだ愛甲の人達がつくったもので、神楽師が昼間にホオズキを売っていた。ホオズキが売られるのは真田与一が持病に持っていた喘息を治そうと、ホオズキの根を煎じて飲んでいた事によ

来すると言われている。現在はホオズキ市を目にすることはできないが、鉢植えのホオズキが社殿で売られており、往時の真田与一に対する信仰の深さを垣間見ることができる。



図 3-1. 設置された売場



図 3-2. 鉢植えのホオズキ

また、天王様に参った人は必ず真田与一を祀る与一堂にもお参りするものだといわれ、参拝者は天王様に参ったあとに行在所の神輿に参り、天徳寺境内にある与一堂にも参拝した。真田神社は疫病よけの神として信じられ、疫病防除夏病み退散の神札を出し、与一堂では痰咳快癒の祈禱とその護符を頒つのが例となっていた。さらには祭りの帰途に伊勢原市坪ノ内の痢病尊へ参る人も多かったという。

3-3. オノボリ交換

真田神社の祭礼の日には「オノボリ交換」といって、参拝者が手拭ほどの大きさの幟を作って持参し、古い幟と交換して家に持ち帰るといいう習慣があった。持ち帰った古い幟を一年間屋内にかけておくと、夏ヤマや疫病を防ぐことができると信じられていた。翌年の祭礼には借りていた幟に新しく作成した幟と若干の奉納金をつけて真田神社へ返還し、御供と祈禱札と共に再び古い幟を持ち帰った。オノボリ交換は近隣の人がすることは少なく、高座郡や相模原の人が多かったという。



図 3-3. 博物館所蔵の幟



図 3-4. 幟は手拭程の大きさ

平塚市博物館には真田神社に保管されていたオノボリ 30 枚のうち 27 枚が寄贈されており、白い布に「奉納真田神社・年月日・地名・氏名」などが墨書されている。いくつかの幟には四隅に面鋳であけた穴があり、この幟を壁などに掛けていたことが伺える。30 枚の幟の奉納年代は昭和一桁代が最も多く、最も古いのは昭和 5 年(1930 年)に愛川町半原から奉納されている。最新の幟は平成元年(1989 年)で、この頃がオノボリ交換の最後であったという。博物館にはこの他にもかつて使われていた明治 28 年(1895 年)の大幟 1 対と、中ぐらいの大きさの幟も保管されている。



図 3-5. 大幟(左)と中幟(右)



図 3-6. 広げた状態の大幟

4. 宵宮

4-1. 準備

ここからは平成 24 年 7 月 7 日(土)に行われた宵宮の様子を紹介する。宵宮では朝 8 時に大祭の準備が開始され、神社総代や真田交友会、そして育成会などが協力して作業を進めていく。社殿では式典の準備、神楽殿では余興の準備、境内では電飾燈籠や竿立て、そして囃子用の山車の組み付けなどが行われる。また、神輿渡御の行在所となる自治会館では、御飯屋のテントが設置される。この年は新調した幟竿で大幟を揚げているが、かつては竿をクレーン車で立てていたため、危険を伴う大掛かりな作業であった。10 時頃になると境内での準備が一段落つき、真田交友会は裏の神輿殿から子供神輿 2 基と大神輿 1 基を出し、神輿渡御に向けて飾り付けなどの準備を進める。



図 4-1. 電飾燈籠の設置



図 4-2. 国旗立て



図 4-3. 幟揚げ



図 4-4. 山車組み立て



図 4-5. 式典準備



図 4-6. 神輿飾り付け

4-2. 子供神輿渡御

午後には小神輿と中神輿の 2 基の子供神輿による渡御が行われる。14 時 20 分になるとお宮の太鼓が叩かれ、2 基の子供神輿をお祓いしたのち、一本締めて 14 時 30 分に真田神社をお発ちする。お宮を出発した子供神輿は太鼓の山車に先導され、真田地区を約 2 時間半かけて渡御していく。2 基の神輿は途中で分かれて渡御したり、アップダウンの激しい道ではトラックへ載せて移動するなどして、短い時間で真田地区を回れるようにしている。



図 4-7. 式典でのお祓い



図 4-8. 宮立ち



図 4-9. 山車が神輿を先導



図 4-10. 休憩所でかき氷を作る

宮入りは 17 時 10 分頃になり、社殿内で太鼓が打ち鳴らされるなか、小神輿と中神輿は大神輿さながらに社殿前の階段に乗り上げて神輿を揉み、輿をおろすと一本締めで解散となる。子供達はここで一度解散になるが、19 時 30 分に大神輿の宮出しと一緒に小神輿と中神輿も宮出しするため、宮出し前の 19 時 10 分頃に再び境内へ集合する。



図 4-11. 宮入り



図 4-12. 社殿に乗り上げて揉む

4-3. 動座祭と宮出し

19 時からは動座祭が執り行われるが、これは御霊を分霊した御霊代を神輿へ遷す神事である。社務所を出発した式典の参列者は社殿裏を回り、境内の外を玉垣沿いに歩いて正面の鳥居から境内に入り、社殿へ上がってから式典が始まる。式典が終わる頃には神輿の担ぎ手である友好団体は、宮出しに向けて境内の正面付近に移動する。



図 4-13. 式典



図 4-14. 宮出しに備える交友会

式典が終わると宮出しとなるが、真田神社では一般の神社では見られない、非常に珍しい宮出しを目にすることができる。社務所前に置かれた神輿では非常に早いテンポで環が叩かれると、境内の外で待機していた担ぎ手達が参道を全速力で走り抜け、神輿の前の輿棒から次々と肩を入れていく。輿棒が全て埋まると神輿が担ぎ上げられ、環が通常の「どっこい」のテンポになると、真田特有の「よいやーさー」の掛け声で神輿を担ぐ。

ここから神輿への御霊遷しが行われるが、ここでも真田神社特有の御霊遷しとなる。一般的には式典の途中で馬の上に置かれた神輿に神主が御霊を入れるが、真田神社では神輿を担いだまま社殿前にギリギリまで寄せ、唐戸の鍵を開けて御霊が入られる。さらに、通常は御霊代を隠すために絹垣(きぬがき)と呼ばれる白い布で神輿ごと覆うが、真田神社では白い布製の管蓋で宮司と御霊代を覆って神輿へ近づいていく。御霊代が神輿へ遷されると唐戸の鍵が閉められ、神輿は再び威勢よく担がれる。



図 4-15. 境内を駆け抜ける担ぎ手



図 4-16. 担ぎながらの御霊遷し

大神輿は参道を通り鳥居を潜って宮出しするが、通りの隅へ移動すると一旦台車の上へおろされ、後から宮出した小・中の子供神輿 2 基を先に通す。大神輿は一本締めをして改めて出発するが、掛け声は一般的な「どっこい」になり、最初の休憩場所となる御仮屋を目指す。

4-4. 神輿渡御と神幸祭

お宮を出発した大神輿は御仮屋のある真田自治会館で休憩を取り、その間に引き返してきた小・中神輿が自治会館を通過してお宮を目指す。休憩を終えた大神輿は御仮屋を出発し、大通りを横断して佐野菓子店で引き返すと、来た道を通って自治会館へ戻ってくる。宵宮の神輿渡御はここで終了となり、神輿が御仮屋へ移されると神幸祭(着御祭)が始まり、三ノ宮の宮司によって神事が執り行われていく。



図 4-17. 御仮屋を通過



図 4-18. 着御祭

5. 例大祭

5-1. 準備と式典

ここからは翌日の 7 月 8 日(日)に行われた大祭の様子を紹介する。大祭の朝は真田交友会が山車パレードの準備のために 8 時頃に自治会館へ集合し、役員らは 8 時 30 分頃に社務所へ集合して前日から泊まっていた宮番と交代する。また、参道の両脇と社殿の北側には露店商が出店を設置し、午後からの営業に向けて準備を進めていく。



図 5-1. お清め



図 5-2. 玉垣沿いを回る参列者

9 時 45 分頃になると式典の参列者が社務所前に集り始め、桶に入った水で身を清めると、隊列を組んで 10 時に社務所前を出発する。社務所を出発した一行は宵宮の動座祭と同様に境内を出て正面の鳥居から境内へ入るが、これは真田神社祭礼の特徴の一つといえる。一般的な神社では参列者は直接社殿へ上がって式典

が執り行われるが、真田神社のように一旦境内の外へ出る動作は珍しい。先頭は飾り付けられた麦藁帽子を被った氏子2名が金棒を突きながら行列を先導し、中ほどで2人の氏子によって担がれる白木の唐櫃には、神前に捧げる幣帛料が納められている。

鳥居から境内へ入った行列は直接社殿へ向うのではなく、神楽殿前に設置された神籬の前に整列し、修祓の神事を済ませてから社殿へ上がる。一般的には式典中に社殿内で修祓が行われるが、社殿に上がる前に特別に設置された神籬前で修祓する例も珍しい。神籬前で修祓を済ませた一行は10時10分頃に社殿へ上がって式典を執り行い、10時40分頃に式典が終了すると社務所へ移動して直会が催される



図 5-3. 神楽殿前での修祓



図 5-4. 社殿での式典

5-2. 山車パレード

大祭の午前中は境内で準備と式典が進められる中、真田交友会は山車で太鼓を叩きながら真田地区を巡回していく。山車は受付の軽トラックと共に真田神社を9時頃に出発し、大祭を知らせる触れ太鼓としてご祝儀を回収しながら巡回していく。午前中のメインイベントは10時からの真田幼稚園での神輿担ぎで、小・中2基の子供神輿を園内へ持ち込んで、園児達に担がせてあげることが毎年の恒例行事となっている。午前中のパレードを終えた山車は真田自治会館へ11時30分頃に戻って昼食を取り、13時に自治会館を出発して再び真田地区を太鼓を叩きながら巡回していく。山車は13時45分頃に真田神社へ到着し、パレードは終了となる。このあとは神輿渡御までの間に特に行事がないため、真田交友会は15時まで一旦解散となる。



図 5-5. 受付が同伴



図 5-6. 自治会館での昼食



図 5-7. ご祝儀のお返し



図 5-8. 午後のパレード

5-3. 神輿渡御

午後は御仮屋で式典があるため、15時40分頃から社務所前に参列者が集り始め、15時55分頃に一行は社務所を出発する。社

殿の裏を回って境内を出発した一行は、宵宮から神輿が安置されている御仮屋へ歩いて移動し、16時から御仮屋にて式典が開始される。



図 5-9. 社務所を出発



図 5-10. 御仮屋へ移動



図 5-11. 御仮屋での式典



図 5-12. 一本締め

式典は16時17分頃に終了し、御仮屋から小神輿と中神輿を移動させると、真田交友会会長の一本締めで神輿が御仮屋から出される。神輿は御仮屋を16時30分頃に出発して真田地区を練り歩くが、途中で台車での移動を入れながら、相原建設での休憩を挟み再び御仮屋へ戻ってくる。一方、子供神輿は18時頃に御仮屋を出発し、大通りを横断するところで大神輿とすれ違う。御仮屋に大神輿が到着するころには、引き返してきた子供神輿が御仮屋を通過し、お宮を目指して元気に練り歩いていく。



図 5-13. 神輿渡御



図 5-14. 民家で揉む神輿



図 5-15. 相原建設で休憩



図 5-16. 子供神輿とすれ違う

御仮屋前を通過した小神輿と中神輿は休憩場所となる柳川牛乳跡地へ18時40分頃に到着し、休憩を取ったのち18時55分頃に休憩場所を出発して宮入りを目指す。子供神輿が宮付けする19時頃には、休憩を取っていた大神輿が御仮屋を出発する。



図 5-17. 境内横を進む子供神輿



図 5-18. 柳川牛乳跡地で休憩



図 5-19. お宮を目指す



図 5-20. 宮入り

大神輿は真田神社の境内に沿って右にカーブし、鳥居前を通過すると最後の休憩場所となる柳川牛乳跡地へ19時35分頃に到着する。担ぎ手は休憩を取った後に20時に出発して真田神社へ向うが、神輿は直ぐには宮入りせず、境内の正面で神輿を台車へ一旦おろし、直ぐに一本締めて再び神輿を担ぎ上げるといよいよ宮入りとなる。渡御中の掛け声は「どっこい」であったが、宮入りは宮出しと同様に真田特有の「よいやーさー」の掛け声となる。



図 5-21. 鳥居前を通過



図 5-22. 最後の休憩



図 5-23. 宮入前の一本締め



図 5-24. 社殿へ神輿を寄せる

鳥居を潜った神輿が参道を練り歩いて社殿前まで来ると、宵宮と同様に神輿を社殿一杯まで寄せ、前の輿棒を肩からおろして両腕で抱えた上げた状態にする。後ろの輿棒はそのまま担がれたまま唐戸の戸が開けられると、管蓋を宮司ごと覆って御霊が神輿から遷し出される。御霊が社殿奥へ運ばれると唐戸の鍵が閉められ、神輿を後退させて前の輿棒に再び肩が入れられると、しばらく社殿前で前後に移動しながら神輿が揉まれる。最後に真田交友会会長の拍子木の合図で神輿が馬の上におろされ、20時30分頃に宮付けとなり、神輿渡御はこれで終了となる。



図 5-25. 御霊を神輿から遷す



図 5-26. 宮付け後の三本締め

5-4. 式典と直会

神輿が無事に宮付けされると社殿内では式典が執り行われる。一方、神輿渡御を終えた友好団体は裏の神輿殿へ移動し、真田交友会の接待を受けて直会となる。真田交友会は社殿の前へ移動して整列し、食事を終えた友好団体を順次一本締めで見送る。



図 5-27. 社殿での式典



図 5-28. 友好団体の直会

式典が20時50分頃に終わると、参列者達は社務所へ移動して直会が開かれる。友好団体の見送りを終えた真田交友会も神輿殿へ移動し、交友会としての直会が催される。直会は22時頃に終了し、社務所と神輿殿では直会の後片付けが行われる。祭典全体の後片付けは翌日の月曜日の午前8時頃から行われるが、真田交友会は夜が明けるか明けないかの時間帯に片付けを開始するため、一部の会員はお宮に泊まってしまう。



図 5-29. 社務所での直会



図 5-30. 真田交友会の直会

6. 神輿

6-1. 真田神社神輿

真田神社の大神輿は明治24年(1891年)の製作と伝えられ、真田交友会の40周年記念となる平成24年(2012年)では神輿造営120年としている。以前所有していた神輿は厚木市の戸田へ明治期に譲渡されており、今なお現存しているようである。神輿はもと素木であったようで、大正11年(1922年)に修理をした際に塗装を施したといわれ、社務所内には大正12年(1923年)7月8日に撮影された神輿の写真が残されている。その後は昭和50年(1975年)に東京の浅草で修繕された。神輿はかつて青年会で担がれていたが、青年会が解散してから神輿を担げなくなったので、現在の交友会が組織されたという。真田神社にはこの他にも子供用の中神輿と小神輿があり、大神輿とは別行動で渡御が行われる。



図 6-1. 真田神社神輿



図 6-2. 大正12年の神輿



図 6-3. 中神輿



図 6-4. 小神輿

6-2. 神輿の掛け声

かつて真田では神輿を担ぐ際の掛け声は「ヨイヤサー、コラサー」で、さらにそれ以前は「コリヤ、コリヤ」の掛け声で揉みに揉んだといわれていた。平塚市域の神輿の担ぎ方は近年になり「どっこい」が主流となっており、真田でも昭和 55 年(1980 年)頃からどっこいに変っているが、真田神社ではこのどっこいの担ぎ方に、それまで伝わっていた「ヨイヤサー」の掛け声を合わせた担ぎ方をしている。大神輿の渡御は真田交友会以外の友好団体も応援に来るため、「ヨイヤサー」の掛け声は宮出しと宮付け(宮入り)の時だけであるが、中・小 2 基の子供神輿は終始この「ヨイヤサー」の掛け声で渡御が行われる。この掛け声の由来は分かっているが、平安時代末期の武士であった真田与一にちなんで、「よいちさん、さー」から派生したという説もある。

7. 真田囃子

真田の囃子は平塚市の殆どの地域で開かれる囃子と同系統で、締太鼓(ツケ)2 個と大太鼓(大バチ)1 個で構成される。曲目にはかつて「バカッパヤシ」・「宮昇殿」・「地昇殿」・「鎌倉」などがあったようだが、現在は「真田囃子」と「ミヤシロデン(宮代殿)」の 2 曲で、大祭の時にミヤシロデンが演奏されることは稀である。また、昔は太鼓の山車が 2 台くらい出ていたようだが、ケガ人が出たために止めてしまった。その後は境内に櫓を建てて太鼓を叩いていたが、近年になりトラックに櫓を載せるタイプの山車を製作した。トラックの山車は宵宮の子供神輿の渡御に同行し、大祭当日は大神輿の渡御が行われる前に単独で真田地区を巡回するが、これ以外は神社の境内に山車をとめて子供達によって太鼓が叩かれる。

太鼓の練習は 6 月から始まり、土日を使って自治会館で計 8 回ほど行われる。6 時から 7 時半が子供の練習で、7 時半から 9 時過ぎまでが大人の練習となっている。子供は小学 4、5 年生がツケ(締太鼓)を練習し、6 年生になると大バチ(大太鼓)を練習する。



図 7-1. 山車



図 7-2. 演奏の様子

かつては青年会と青年団とは別に太鼓を叩く「テイコレン(太鼓連)」が組織され、テイコレンには高等科を終えた男子が入り、結婚すると抜けた。現在は太鼓連が組織されておらず、太鼓の運営は神輿と同様に真田交友会が中心となって行われ、真田神社の祭礼を盛り上げている。

7. むすび

真田の天王さんの祭りについて、かつての盛大さを耳にする参加者は多く、筆者もその一人であった。今回の取材では真田神社の祭礼の中でいくつか特異な点に気付いたが、その後の文献調査を合わせることによって、かつての旺盛な祭礼の様子を垣間見ることができたと感じている。また、真田は開発によりその景観が急速に変化して来ている地域であるが、僅かに残されている昔ながらの風景が、往古の祭礼の姿を思い描く手助けとなっているような気がする。

真田神社の信仰の篤さは、真田与一の信仰による影響が大きく寄与していたと思われ、ホオズキ市はそれを象徴する一つであるといえる。大阪から運ばれた鳥居や、旧玉垣の寄進者の範囲の広さ、さらにはオノボリ交換の伝承など、真田神社に関する文献や伝承などは平塚市以外にも存在すると推測される。今後も他の祭礼を調査する際には、真田に関して新しい情報を得られるように留意していきたい。特に、厚木市の戸田へ譲渡された古い神輿は、現在も現役で担がれているという情報もあるので、機会があればこの神輿が出る祭礼を調査してみたいと思う。

近年では同時期に開催される平塚七夕まつり(第 1 回目は昭和 26 年開催)の盛行などにより、往時の賑わいはなくなったといわざるを得ないが、真田独特の宮出し風景や、神輿を担いだままの御霊遷し、さらには真田神社の祭礼には欠かせない御飯屋の存在など、一般的な神社では見られない貴重な経験ができる祭礼であることは疑いのないことである。現在でも引き継がれている格式高い祭礼の形式が、今後も末永く継承されていくことを祈願したい。

○参考文献

- 『家と村Ⅲ -平塚市旧真田村-』 平塚市博物館 (1980)
- 『平塚市民俗調査報告 4-金目・金田-』 平塚市博物館 (1984)
- 『平塚市史 12 別編 民俗』 平塚市博物館史編さん係 (1993)
- 『ふるさと再発見～金目・岡崎を訪ねて～』
平塚市観光協会 (1997)
- 『平塚のお祭り -その伝統と創造-』 平塚市博物館 (2005)
- 『真田神社 夏の祭礼』 池上正二
東海大学出版の月間『望星』の投稿論壇
- 『発見!ひらつかの民俗 第 11 回 真田のお天王さま』
平塚市博物館ホームページ

作成 : 2013 年 1 月